

前田和利先生退職記念論集の刊行に寄せて

経営学部長 高井 徹雄

駒澤大学は、その前身を 1592 年（文禄元年）、曹洞宗により禅の実践と仏教の研究、漢学の振興のため、江戸駿河台吉祥寺に創設された学林に求めることができます。学林は後に中国の名僧により「旃檀林」と命名され、江戸時代には、漢学研究では幕府直轄の昌平坂学問所と並び称される存在だったと聞き及んでいます。はるか時は流れ、1925 年（大正 14 年）の大学令により、旃檀林の流れをくむ曹洞宗大学は駒澤大学と改称、寺院の子弟以外に広く門戸を開放することで、名実ともに今日的な意味における大学となりました。

とくに第二次大戦以降の本学の発展は目覚ましく、1949 年の学制改革により新制大学として仏教・文学・商経の三学部で発足、1964 年には法学部を開設、翌年には商経学部が経済学部へと改称されました。日本で私学初の経営学部を明治大学に創設した佐々木吉郎先生が、高度成長期における経営学ブームを背景として、本学に経営学部を開設したのは、1969 年のことであります。駒澤大学は、21 世紀を迎えて、医療健康科学部、GMS 学部を加え、常に時代の要請に応える都市型総合大学として発展を続けています。

前田和利先生が、このような歴史と伝統を重んじながら進取の気性に富む本学に経営学部専任講師として赴任されたのは、学部設立の翌 1970 年 4 月のことでした。前田先生は、明治大学大学院経営学研究科において研究者としての第一歩を踏み出されて以来、一貫して、経営史学分野における研究業績を積み上げてこられました。なかでも、百貨店、総合商社など主要な流通機構に関する研究では、日本の経営史学における第一人者として、誰しもが認めるところです。また、そのお立場から社史・伝記なども数多く手掛けられ、近年では、「進化の経営史」（橘川武郎、島田昌和編、有斐閣 2008 年）において、「第 7 章 創業者からの継承とビジネスの進化—伊勢丹と二代小菅丹治」を執筆されるなど、第一線の研究者としてのご活動は、益々その厚みと深みを増しておられます。

私が、前田先生に初めてお会いしたのは、本学部へ赴任した1988年のことでした。私より10歳年長、とはいえ、当時まだ40台半ばの先生でしたが、学部の中心で堂々と振る舞われるお姿を拝見して、大学教員として格の違いを痛感させられたものです。以来、若輩者としては、学内の行動規範に係わることに ついて、まずはお手本にすべき方として、敬意を払いつつ接して来たつもりです。日頃、我々に耳触りの良いことなど仰らない方ですから、失礼を承知で申せば、第一印象はやや無骨な感じ。でも、だからこそ、「巧言令色」の逆、実は同僚後輩思いの情に厚い方ではなかろうか？などと、勝手に想像しておりました。実際その思い通りであったと確信したのは、何年か経った後のことでした。

前田先生は、平成5年から経営学部長を1期2年、続いて経営学研究科委員長を2期4年という6年の長きに渡って歴任され、学部・研究科の先頭に立って組織運営の舵取り役を担われました。その後も今日に至るまで、常に中心軸としての存在感をお示し下さり、組織を代表して心より感謝申し上げます。

最後は私事になりますが、前田執行部がスタートを切った平成5年4月、私は在外研究を予定しながら直前になって大病を発症、留学は取消し即刻入院となりました。当初は命すら危うい状態でしたから、休職はもちろん退職もやむなしと覚悟を決めておりました。幸いなことに、2ヶ月の入院で病状は回復に向かい、執行部のご判断により、約半年の傷病欠勤の後、復職を許されました。その後は、体調も徐々に回復、仕事を続けることができ、3年前にはやっと病気も完治しました。最近、学部長室で調べものをしていて気付いたのですが、当時の教授会議事録には、お見舞いに来て下さった時の私の病状や回復の状況、復職の目途など、執行部報告として逐一丁寧に綴られておりました。病に躓き途方に暮れていた私に、惻隱の情に満ちた対応をして下さったことに、いまさらながら、感謝の念を強く致しました。本当に有難うございました。

前田先生、学部草創期より長きに渡る駒澤大学でのお勤めご苦労様でした。先生のことですから、大学組織から解放されて、より自由な学究の徒としてご活躍されることでしょうか、時々、古巣駒澤にお立ち寄り下さい。そして、今後とも、ご指導ご鞭撻の程、どうぞ宜しくお願い致します。